

石浦 悲願の 今季初戴冠!



Driver.1 石浦 宏明

今シーズンの前半戦は、どちらかというと僕たちが不得意にしているサーキットでのレースが多く、うまくいかないレースが続いていました。そんな中で、後半戦でポイントを取り、リードを伸ばしたいと考え、このレースで大会が非常に大事な大会。ここで勝たないと今シーズンのチャンスを逃さないという意識がありました。トラブルもあり、決して楽な展開ではありませんでしたが、チームのサポートのおかげで乗りこえ、レースができました。予定通りに復帰できてホッとしています。次の岡山も得意としているサーキットなので、チャンピオンシップでもリードできるようにしたいと思います。



総監督 浜島 裕英

1号車は、ドライバーとチームはいい仕事をしていましたが、トラブルの多いレースとなりました。なんでもかき立てておこなう。2号車に関しては、順位を下げてしまったことが残念です。選手が出世しやすいレース展開になりましたので、岡山のレースまでしっかりと分析し、過ぎを振り返りてみたいと思います。

Race Report

Round.5 TWIN RING MOTEGI 8/19 Final 決勝 2018年8月19日 ツインリンクもてぎ
天候: 晴れ / コース状況: ドライ / Time [1:24'19.998]

監督 立川 祐路

1号車に関しては、結果的にうまくいきましたが、チームとしては競争順位に無い順位が前年より多かったです。それでも、メカニックたちはしっかりとピット作業をこなしてくれました。今のドライバーに関しては不安でしたが、ドライバーも頑張ってくれました。チャンピオンシップを考えると、非常にいい1レースです。ただし、チームの目標として、順位を上げて優勝を争う位置で走らなければならないです。そういう意味では、2号車が不得で終わってしまったことは悔しいですね。次戦の岡山では2台揃って優勝争いすることを目標に戦っていききたいと思います。

Driver.2 国本 雄資

この週末は速さが足りず、クルマのバランスを求めていくとタイヤを磨滅してしまう。とても難しい状況で戦うことになりました。ミディアムタイヤでスタートし、最終ラップでソフトタイヤに交換してソフトタイヤを使う作戦は悪くなかったのですが、ミディアムタイヤでのペースが安定以上に速く、ソフトタイヤでもタイヤの磨耗が激しかったので、最終は本当に苦しいレースになりました。次の岡山ではしっかりと磨き立てておし、速さを取り戻せるように頑張ります。



SUPERFORMULA決勝日の最初の走行は、午前10時からフリー走行となった。30分間のセッションで、国本のベストタイムは4周目に記録した1分34秒918で4番手。その後ヘアピンでオーバーテイクしてしまいマシンをストップさせたが、大車には至らなかった。石浦は、前日に周回数を多くこなしたソフトタイヤを使っていたために1分36秒181で8番手だったが、レースに向けたタイヤのロングランチェックを行い、また入念にスタート練習も重ねるなど、決勝に向けた準備を着々と進めていった。決勝レースは午後2時15分にスタート。ポールシッターの石浦を含め、上位4台がソフトタイヤでのスタートを選択。シグナルのブラックアウトと同時に抜きの旗を出しを見せた石浦は、さらにオーバーテイクシステム(OTS)も駆使してトップのポジションを固めようとしたが、OTSの効力が切れたタイミングで、2番手に付いていた松下信治選手がOTSを使って壁チャージをかけてきた。5コーナーでわずかにスベ

を空けてしまった石浦は、松下選手の先行を許し2位に後退。松下選手のペースに合わせてレース序盤を走っていくことになった。もともと、先行抜け切りの作戦を予定していた石浦だが、ここでタイヤをいたわりながら松下選手とヒットインを待ち、レース後半で勝負する作戦にスイッチし、1秒前後のギャップを守りながら周回数をこなしていく。レース後半に入った27周目を越えて松下選手がピットに向かうと、石浦はモードを切り替えたかのように一気にペースアップ。それまで1分37秒のタイムを重っていたのに対し、28周目には1分36秒0、29周目には1分35秒8と、ハイペースで後続とのギャップを広げていった。レース終盤の40周目に暫定2番手に付いていた平川亮選手がピット作業に向かったのを確認すると、翌周にヒットイン。メカニックたちは迅速な作業で、アウトラップの平川選手がホームストレートに戻った直前に石浦をコースへ送り出すことに成功し、トップの座を守って残りのステイントへと入った。ミディアムタイヤに換えた後も石浦のペースは変わらずにいった。見えたが、実はレースの序盤からソフトタイヤを抱えており、34周目にはソフトタイヤが足りず、1分38秒台までタイムを落とすことになった。ラップタイムはすでに36秒台まで回復させていたが、わずかな不安を抱えたままレース終盤へと向かっていく。それまでに築いていたマージンを使いつつ、残り2周は1分37秒台までペースを落とさず、ドライバーズチャンピオンシップに向けて重要な今季1勝目を勝ち取った。予選10位の国本は、ミディアムタイヤでのスタートを選択。燃料補給のタイミングを考え、最短周回でソフトタイヤへと交換する作戦だ。まずスタートは切ったものの、後方からロケットスタートを決めた1台が大幅に順位を上げたことで、オープニングラップでは11番手に後退。そこから、ベストラップを更新しながら9周目まできたところ、ピ

トイン、ソフトタイヤへと交換して挽回を目指した。タイヤに熱が入ってすぐの12周目には1分35秒731をマークして自己ベストタイムを更新。同じミディアムタイヤで短いステイントを走り、ソフトタイヤへと交換していたニック・キャシディ選手、山本尚貴選手と集団でのバトルを展開していった。序盤は前の2台に食らいついていた国本だったが、タイヤの消耗が早く、徐々に間を空けられてしまう。苦しい展開のなかで国本は懸命な走りを見せ、終盤までは後続からのチャージを喰っていたが、41周目に14位に後退。最終的には15位まで下がりながらもチェッカーを受けた。W表彰台を獲得した前戦のように、揃っての好結果には繋がらなかったもさう。しかし、石浦はこの勝利でシリーズランキングを3位に押し上げ、トップともわずか3ポイント差に迫っている。次戦の岡山はチームとして得意としているサーキット、チームランキングでもトップにつけるため、2台揃っての表彰台を目指す。